



話題の本棚

濱野ちひろ著『聖なるズー』

ケイト・マン著、小川芳範訳『ひれふせ、女たち ミソジニーの論理』

特集／写真

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/



UNIV. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

愛とセックスの問題を見つめ直すために

聖なるズー

濱野ちひろ著
集英社



〈いろいろな形の愛がある〉とはなかなか陳腐なセリフだが、世界にこんな形の「愛」が存在するというところに、かなり強い衝撃を受けた。「動物に対して感情的な愛着を持ち、ときに性的な欲望を抱く」人々、ズーフィリアー—そんな「ズー」たちに取材し、その実像に迫るのが、昨年の「第一七回開高健ノンフィクション賞」受賞作でもある、濱野ちひろの『聖なるズー』である。

「私には愛がわからない」。そんな意味深な書き出しとともに本書ははじまる。性暴力の被害者という仕組な過去をもつ著者は、やがて大学院へと進学し、文化人類学の観点からセクシュアリティの問題に向き合うようになる。そんな中「動物性愛者」の存在を知った彼女は、彼らのコミュニティ「ゼータ」周辺の人々と接触するため単身ドイツへと向かう。現地で見にしたのは、彼らの「愛」の多様なあり方であった。犬からのセックスの「誘い」を感じ取った者、馬とのセックスが初めての経験だった者、何匹ものほかねずみと「群れ」の仲間として生活をともにする者……体験談の単なる列挙ではなく、動物愛護に関わる法制上の問題や宗教的背景といった文脈も絡めながら考察を重ねているため、実に読み応えのある著作となっている。

さて、本書を貫くのは、ズーたちの生の声をしっかりと聞き届け、その意味するところをなるべく正確に捉えようと努める、著者の真摯な姿勢である。たとえば、ズーたちは「パーソナリティ」を見出したパートナー（＝動物たち）との「対等」な関係を実現するため、彼らとの間に性的な関係を結ぶ、という見方が本文の中で示される。彼らが見出す「パーソナリティ」や「対等性」とは一体何なのか、単なるインタビュー調音に基づく安易な一般化に帰すことなく、それぞれがズーたちと可能な限り生活を共にし、寄り添いながら彼らの思いを理解しようとする彼女の姿勢には、(客観性が薄いという批判は免れないとしても) 非常に好感がもてる。それは、動物と人間との間の、言語も種も超えたコミュニケーションの現場であるからこそ、重要な実践であると言えよう。そしてまた、ズーたちとのつながりのなかで、性暴力の被害者として彼ら同様、弱い立場に置かれていた著者が、過去の傷を乗り越えていく、というストーリーをも、そこに読み取ることができるとも思えない。

タイトルに掲げられた「聖なるズー」とは、あるズーが一部のズーたちを指して言った表現に由来する。これをタイトルとしたのはここに描かれる〈ズー像〉はあくまで一面的なものに過ぎない、という著者自身の控えめな姿勢の現れたが、愛とセックスにまつわる問題のみならず、動物と人間との関係について考え直す機会を与えてくれる点において、本書を手取る意義は大きい。これから、本書を皮切りに〈聖なるズー〉をも含む動物性愛に対する、社会の理解がさらに進んでいくことを願ってやまない。(投稿・松風)

(二一〇頁 本体一六〇〇円 11月刊)

「女性差別なんて、今どきもう存在しない?」?

ひれふせ、女たち

ミンジニーの論理

ケイト・マン著

小川芳範訳

慶應義塾大学出版会



ミンジニー、この言葉を耳にしたことのある人は少なくないだろう。言い換えると、女性嫌悪。SNSなどで広く使われている言葉ではあるものの、これまで学術的に定義されてこなかった。本書はアメリカやオーストラリアの事例をもとにミンジニーを定義しなおすことで、その背後にあるものを可視化することに成功している。

ミンジニーの背後にあるもの

一般に「女性嫌悪」と解釈されることからわかるように、ミンジニーは心理的な問題だとされている。これにたいし、マンはミンジニーを社会的領域へと移そうとする。彼女の定義はこうだ。「ミンジニーは第一に女性を標的とする。そしてそれは、女性が、ミンジニストと呼ばれる男性の心のうちにおいて女性であるからではなく、女性が男性の世界（歴史的に家父長制的な世界）において女性であるという理由による」。こう定義したことによって、ミンジニーは個人の内面の問題を超えて政治的な問題となる。

端的にいえば家父長制とは、女性が男性との関係において隷属的な立場に置かれるシステムである。女性は与えなければいけない——愛情を。尊敬を。セックスを。安らぎを。重要なのは、男性がこれらを受け取ることが家父長制においては当然の権利とされてい

るのだ。だからこそ彼らは、「傷つけられた権利意識」——つまり何も当然の権利として持っていたものを奪われたことになり、被害者意識を抱くことになる。こうして男性が不当にも傷つけられると、彼らは加害者たる女性を処罰して、秩序を回復しようとする。「ミンジニーは第一義的に、家父長制秩序の「法執行」部門と理解されるべきである」。シェンダー規範の違反者を罰するという政治的現象として、ミンジニーは現れるのだ。

バックラッシュとミンジニー

女性たちはこうした家父長制やミンジニーに抵抗すべく声をあげてきた。とりわけ近年においては#MeTooなど、女性みずからセクハラや性暴力の被害を告発する機会が増えている。しかしそれへの反動として、「被害者を演じている」、「同情を買おうとしている」という中傷に遭うことも多い。だが中傷者たちが言うように、被害を訴えることで女性が社会から同情や共感を得ることはそもそも難しいのだとマンは言う。彼女たちが被害を訴えるときには、申し立てを信じてもらえなかったり、彼女自身に非があるとされたりするからだ。被害者女性を取りまく過酷な状況にもかかわらずこうした「被害者叩き」がまかり通るという現象は、伊藤詩織さんの事件に代表されるように、日本でも日常茶飯事と言っても過言ではない。「女性差別なんてもうない」、「今はむしろ女尊男卑だ」——本当に? それは、不当な権利意識が傷つけられただけではないのか?

このような社会をどう変えればいいのか、本書は希望を語らない。ただわかるのは、黙ってはいけない、それだけだ。

(四四八頁 本体三二〇〇円 11月刊)

〈特集〉 写真

スマホの写真フォルダは、あなたの視線の宝箱。いいなと思った光景が並び、ネットでいいねをつけられる。フォルダを開くと今より若い自分が現れる。かつての日常が届かない一瞬となり、その一時があなたを大人にさせる。誰もが写真を撮る今だからこそ「写真とは何か」を考えてみませんか。この度「撮ること」を軸に三つの角度から写真集を書評しました。是非本を手に取り、改めて写真の持つ力を感じてみてください。

(きもの)

世界の見方を教わること。

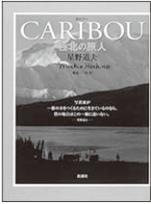
写真集を見ると、撮影者の眼差しを意識する。結局何を見ているのかは、どう生きてきたのかと切り離せるものではないのだろう。写真を通して他人の視線から世界を見た時、自分が見ている景色から少し離れる。私にとって好きな写真家とは、世界の見方を教えてくれる人かもしれない。

——写真家とは旅人である。

最も好きな写真家は誰かと聞かれたら、迷うことなく星野道夫の名前を挙げる。アラスカに魅了され、撮影の中で亡くなっていった道夫の写真は、動物や自然の広大さを示すことで、時に傲慢になってしまう人間の卑小さを論じてくれる。

『CARIBOU 極北の旅人』という本は、アラスカの旅人カリブーについての本だ。春になるとカリブーは大群で移動する。何千というカリブーが波のように移動する風景をもとめて道夫は一〇年近くそのチャンスを探していた。彼らがどこを

移動するのは全く読めず、その遭遇は偶然に任せるしかない。近年、近代化に



伴う開発の中でアラスカの自然も変化していた。何百年と繰り返されてきた生命の営みが消えてしまう前に、道夫はその光景を撮りたかった。

そして出会うカリブーの群れ。探し続けた風景がそこにはあった。人間がこうしている間にも、悠久の大地の中で動物たちは各々の時間を過ごしている。不思議と動物の顔を見ているはずなのに、撮影者である道夫の朗らかな笑顔が想像できた。この一瞬、この一枚を撮るためにいくつもの夜をテントで超えてきたのだろう。優れた旅人の眼差しを、写真を通じて味わうことができる一冊。

また近年再評価を受けている写真家、ソール・ライターも旅人のような写真を撮る。

『ソール・ライターのすべて』モノクロ写真からカラー写真への移行期を含めて、ニュー



ヨークという街を撮り続けた写真家。窮屈な部屋に住み続け、街並みのなかを徘徊する彼は星野道夫のような冒険家とは程遠い。

しかし彼の写真は旅人のように、匿名者と

して世界を覗き見するような風景ばかりだ。目立つのが嫌いな男だった。地位も名誉も捨てて一人隠遁者のように生活する男だった。住み慣れても街に馴染まず、陰のように生きる彼の写真には、情緒や日常を感じさせないドライさがある。自分たちが過ごしている日常が、非日常の眼差しで見つめられること。彼の写真が時代や地域を超えて評価を受けるのは、時の潮流から離れ、常に異邦人として世界を写していたからかもしれない。

——写真家とは作家である。

写真家はこの世界の現実を切り取るように、時にこの世界になかった現実を眺める。最後に紹介したいのはマリア・シチュアルボヴァー著『Swimming Pool』だ。

スロヴァキア出身の彼女が興味を持ったのは社会主義時代に作られた古いプールだった。無機質で幾何学的に作られたスイミングプールを彼女独特の世界観で彩られ撮影した本書。そこにはSFのように近未来的で、文学のように郷愁的な味わいがある。



モデルたちの無表情、波も波紋もたないプール、徹底的にまで物が排除された風景、そのなかで色使いだけが強調された写真。静

物画のように存在する人間たちの光景を見てみると、別の世界線に迷い込んだような錯覚をおぼえる。

懐かしい過去のようで、いつかくる未来のようにも思わせる光景は、二一世紀にありえなかもしれない社会主義の風景かもしれない。まるでタルコフスキーの映画のように、マー

写真が写すのは

写真には何かが「写っている」。人物が、風景が、あるいは他の何かが。何も写っていない写真は無い。写真から見えてくるのはまづ、写っている「もの」と撮影者との関係性だ。そして写真を見る我々は、その行為を通じて写真に写る「もの」と、撮った「人」との間に関係を結ぶ。いわば三角関係だ。前章では写真から「人」を読み解いたが、今度は写真が映し出す「もの」について考えてみたい。撮影者ではない我々は、写真に何を見て取るのだろうか？ ここでは我々の身近な日本についての写真を例に取り上げよう。

【非日常の美】

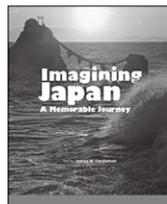
写真は何を写しているだろうか？ 自撮り、記念写真、風景写真。よくあるのは観光地の有名な風景、だろうか。一冊目はそれを。

『Imagining Japan A Memorable Journey』

リアは写真という表現を使って一片の詩を編んでいるようだ。

好みの写真集に見入った後、この世界の見方が少し変わった気がした。あの風景を切り取って、誰かに贈りたくなった。次章では写真家の目線ではなく、写真に写る対象を中心に紹介してみよう。(きもの)

(IBCパブリッシング)は外国人から見た日本の美しい風景を選びすべて載せたものだ。富士山はもちろんのこと、



宮島や清水寺、東京タワーといった定番の観光地の写真、あるいはさっぽろ雪まつりや鞍馬の火祭などの祭礼行事の写真をいかにもフォトジェニックに撮っている。いわばこれは写真によって「日本」というイメージを作り上げているのだ。こうあってほしいという理想の姿を写真に焼き付ける。そして理想の姿は写真という媒体に裏付けられてより強化される。たしかにこんな美しい瞬間が存在したのだろうか。でもどこか我々の日常とは遠い感じを受ける。美とは非日常にあるのだろうか。

【何気ない風景】

そういう写真と対比を成すのが路上スナップかもしれない。最近では肖像権の侵害を非難する声に押されて肩身の狭そうな撮り方だが、その時その時の「生」な様子、特に普通の人々の日常の一コマを切り取るという点では路上スナップに勝るものはない。ここでは森山大道の『K』（月曜社）を挙げよう。



森山は長年東京の路上を写してきた。中でも池袋や新宿といった繁華街、場末の様子を。紅灯の巷の昼の姿、あるいは老人の姿が写真の中で逆に印象的なイメージをまとう。自分の中にある「犬」、「猫」、「虫」の命するがままに路地をうろつくのだ、と彼は言う。「ぼくはこいつら三匹を連れて、世俗界を、俗のままにコピーしつづけるだけだ」、そこに表れた卑俗さはまぎれもなく人の営みそのものである。卑俗さに溢れた写真からは我々人間の等身大の姿が見えてくる。何気ない様子をリアリティックに捉える。写真は絵画と異なり写実性の部分が優れているのだという主張はこんなところで息づいてくるのかも知れない。

【変化する風景】

そんなイメージが一瞬のものだとすれば、変化を捉えて残そうとする写真もある。今な

らタイムラプスなど動画で残すことの多いタイフの記録だが、当時写真は残した。富岡畦草著『東京定点巡礼』



（日本カメラ社）はそんな変化が如実に現れた街、東京に焦点を絞って昭和から平成にかけての街の変化を、いわばビフォーアフター的に見せる一冊だ。都電が走る時代から高度経済成長、そして平成。同じ地点から日々撮影を重ねたものが時の痕跡を残す。緩やかに変化を連続して撮っていく動画と異なり、その瞬間を切り取って見せる写真から伝わってくる変化はいわば断絶。オリンピックの開催予定に合わせて国立競技場周辺の景色が一変したりするなど現在も常に変わり続けている

私が、私を撮る

ここまででは撮る側と撮られる側に注目し、写真について思索してきた。終章では、二〇一九年度の木村伊兵衛写真賞を受賞した片山真理『GUT』を取り上げ、「撮る」という行為そのものを問い直すことと、「写真とは何か」を今一度考えたい。

木村伊兵衛写真賞とは

木村伊兵衛写真賞は、日本を代表する写真

東京。翻って京都も今や街中のあちこちでホテルの建設ラッシュと町家の解体で実様相を変化させている。変化という営みは我々の周りを取り巻く、いやむしろ我々自身も変わり続けるのだ。そんなことを感じさせろ。

一瞬であれ、時間をかけてであれ、我々は、そして撮影者は写真に写った「もの」と対峙する。そうして我々と撮る「人」と写った「もの」との間に関係が結ばれるというわけだ。ではその関係とはどんなものだろうか？ 写真を撮る時、見る時、そこには見る側一見られる側という関係性がまず生まれる。これまで、撮る側と撮られる側は異なる者だったが、今度は撮る者と撮られるものが同じ場合を見てみよう。その濃密な二者関係に撮影者ではない我々はどんな関係を経るのだろうか？（わた）

家の一人である木村伊兵衛の功績を讃え、一九七五年に朝日新聞社が創設した賞である。

対象となる作品は、プロ・アマ、年齢を問わず、新人写真家の制作した毎年一月から二月までの写真集、写真展であり、四月号の『アサヒカメラ』で受賞作品が発表される。純粋な写真表現を評価し、「写真界の芥川賞」とも呼ばれる。

二〇一九年度も毎年同様に受賞作が選ばれた。表紙を飾るのは受賞者……ではなく若手の男性アイドル。受賞者のインタビューは各一頁にすぎず、石内都や平野啓一郎ら四人の選考委員のコメントもたった二頁。日本の写真雑誌のほとんどは写真雑誌ではなく、どこかの機材を使い、どのような構図で撮影すれば良いのかという話に終始するカメラ雑誌である。しかし、純粹な写真表現を評価する本賞を主催する雑誌であるならば、一年に一度くらいは「写真」と真正面から向き合う誌面にすべきなのではないだろうか。

片山真理 [GIFT]

本書は片山の二〇〇五年のデビュー作から二〇一八年の最新作までを収録した作品集である。片山の紹介を説明する前に、この写真集自体と向き合ってみる。

表紙には指が二本の左手と、指が五本の右手で円を作っている写真が貼られ、背表紙と裏面には目のようなイラストがある。片山は何を覗くのか。

写真集を開く。一枚目は、両足に義足を付けた片山のモノクロのセルフポートレートだ。モデルのようにフラットとした片山自身の写真



がその後もしばらく続くが、突然、裁縫で作られた足を撮ったカラー写真が現れる。手作りの溢れるオブジェからは生活臭が漂う。今度は接合部のネジが剥き出しになった義足が提示される。金属の鈍い光沢を見つめていると、口の中に血の味が広がっていく。その後も生物としての片山の身体は、どこか人間臭いキルトのオブジェと、無機物の香りを拭い去れない義足を装着したり外したりする。自分の身体はどこまで自分で、どこからが自分ではないのか。その違和感は巧みに差し込まれる貝殻などの異物によって身体中を蠢き回る。

次第に片山はそれらのオブジェと同化していき、たぐさんの指の模様のあるハート型のオブジェへと姿を変えていく。新しい自分が始まり、片山はまた自分を覗き込む。

片山は左手に指が二本しかない。九歳の時には両足を切断した。「普通」になりたいけど「普通ではない」自分の輪郭をなぞるために手や足の手縫いのオブジェを作り始めた。自分の身体はあくまでオブジェの質感を伝える「マネキン」であると片山は語る。どんな人も初めから「普通」の振る舞いのできる訳ではなく、周囲の人を見てつぎはぎのように自分を作り上げていく。作品制作を続けることで、片山は「みんなと同じだ」と思えたと

いう。自分の身体を突き放し、一から自分を作り上げていく過程を封じ込めた写真は観る側の身体と精神をも解体し、再構成する。

二〇一七年には娘ができた。もしも娘が五体満足に生まれてくることができなかつたら、自分の持っているものである「指」をあげて安心させたいという思いを込め、片山は指の写真を書写したハート型のオブジェを制作する。だがそれはクロテスタで、娘が戸惑ってしまうようなオブジェだと片山は感じた。この経験から、「[GIFT]——独語で、与えられないものとしての「毒」——をタイトルに選んだという。表現者として写真を撮ろうとするならば、「自分とは何者か」という問いからは逃れられない。片山自身の姿容をも写真にした本書は、その問いに対する一つの真摯な向き合い方を私たちに教えてくれる。

写真そのものは「それはかつてあったもの」ではない。高価なカメラを使い、たぐさんの「いいね」を集めても、それは同じだ。目を閉じて、あなたの本当に撮りたいものを思い浮かべてみよう。「私は、なぜ、何を、撮りたいのか」。カメラを構えることで被写体と自分自身を見つめた最果て、それでも撮らざるを得ないような切実さを伴う写真。それこそが、他の誰のものでもない、あなたにとっての写真なのだろう。

(石透)

新刊コーナー

雲

エリック・マコーマック著

柴田元幸訳
東京創元社

人は誰もが運命の相手を夢見ている。しかしもし出会ったとしても結ばれなかったとしたらどうだろう。真実の恋愛を逃したという後悔は、人生をどう変えていくのだろうか。

主人公ハリーによる自伝として語られる本書は、メキシコで『黒曜石雲』と書かれた本との出会いから始まる。それはかつて彼が暮らしたスコットランドの田舎町ダンケアンについての奇妙な天候を巡る本だった。ダンケアン、そこは運命の恋と出会った場所であり、癒えることのない傷を手にした場所でもある。絶対に帰りがたかない場所であり、しかし何度追い払っても心が帰ってしまう場所。古書の由来を調べる中で、彼は何十年ぶりにダンケアンに足を運ぶことを決意する。

若かりし頃の恋愛、失恋のショックからアフリカ・南米を旅する冒険。カナダへの定住

と愛を信じられない家族の生活。ハリーの人生は壮大で重厚だ。読者は徐々に彼にとってダンケアンという町の重みを理解していく。運命の人に裏切られたという記憶が、彼の人生に深く付きまといどこまでも離さない。そして終盤その町に彼が再びたどり着いたとき、恋と裏切りの真相を知ることになる。

古書の由来と主人公の自伝という二つの軸は全く別々の要素なのに奇妙なリンクをみせる。幻想的な世界と純文学のような心情描写、著者マコーマックの記述力に読者は舌を巻くはずだ。おそらく現代の古典として長く読み継がれる本となるだろう。(きもの)

(四六二頁 本体三五〇〇円 12月刊)

死にたいけどトッポッキは食べたい

ペク・セヒ著 山口ミル訳
光文社

「我慢できない

ほどつらい時も、

友だちの冗談に笑

ったり、そうしな

がら心のどこかで

虚しさを感じ、それでいてお腹がすいたから

と、トッポッキを食べに行く」そんな自分を

持て余す一人の女性が、カウンセリングを受けることを決意した。本書は、毎週行われるカウンセリングでの「先生」との対話形式で綴られる記録である。カウンセリングといっても、「先生」と交わされる話題の一つ一つは他愛のないこと——友達付き合いや家族関係がうまくいかないこと、仕事やサークル活動でのもやもや、夜によく眠れないこと、自分の容姿にコンプレックスがあること——など、私たちもどこか当たりのある話題が多く、まるでカウンセリングを迫体験し、著者とともに内省を深めていく気分させられる。

「先生」との対話を重ねつつも、憂鬱さから解放されるという「ハッピーエンド」は訪れない。それでも、著者は決して停滞しているわけではない。その証に記録の終盤では、いくつかのささやかな、しかし希望のある決定とともに締めくくられている。

「私はいつも得体のしれない渴きを覚え、自分によく似た人からの共感を求めていた。そして、そういう人たちを探して彷徨うよりも、私自身がそういう人になってみようと決めた。ほら、私、ここにいるよと、力いっぱい手を振ってみようと思ったのだ」。五月病の張りつめて疲れた心にしみ込んでくれるだろう一冊だ。

(二二〇頁 本体一四〇〇円 1月刊)

(投稿：のし梅)

ポラリスが降り注ぐ夜

李琴峰著
筑摩書房

夜、新宿二丁目の、L字の形をした小道。レスピアンバーが立ち並ぶうちの一軒「ポラリス」の、青い扉に手をかける。レスピアン、Aセクシャル、バイセクシャル……そこはさまざまなセクシュアリティの女たちが集う場所。夜の帳はほどけて一つの糸に、それぞれの物語になってゆく。

七の短編の主人公はさまざま。恋愛感情を持たない蘇雪は、友人の利徳から「名前とこの名前は、自分は一人じゃないってこと証拠なの」と言われ、自分自身にAセクシャルという名前をつけた。カテゴリーを得るということは、自分の居場所を作ることだった。またポラリス常連の香凛は、恋人の楊欣に、バイセクはいつか男に走るから信用できないと言われ喧嘩になった。完全なレスピアンではないが、バイセクシャルというのもしっくりこない。ポラリス店主の夏子は言う、「名前がいくつあっても足りないくらいみんな違

うから、そんな簡単に説明されてしまうのって、いいのかなって」。複数形のわたしたちと単数形のわたしのあいだを揺れ動くアイデンティティが、透徹した筆致で描かれる。「私達は、ずっとここに居るの。常に複数形で、いるのよ。……」複数形は、つまり代替可能ということ。しかし、単数形としての生と歴史も、きちんと覚えられているべきではないか。複数形で捉えられるものを単数形で語ることができるのが、文学のもつ力だろう。彼女たちは緩やかに繋がりながら、流星のよつぱにひとり光っている。(ミセ)

(二六五頁 本体一六〇〇円 2月刊)

なぜ僕らは働くのか

池上彰監修
学研プラス

「弊社を志望した理由は何ですか?」こっちが聞きたいくらいだ。——そんなあなたへ。なぜ僕らは働くのか、本書はそのヒントになるかもしれない。

本書は「将来の働き方について中学生や高

校生に考えてもらおうと願って」作られたものであると、監修の池上彰氏は言う。そのため、本書は中学二年生のハヤトくんが自身の将来を考えるマンガのパートと、「仕事」について中高生向けに解説したパートの2部構成になっている。ハヤトくんは「働くなんて遠い未来のことに感じてよくわかんないよ」とこぼす。年齢の差こそあれ、ハヤトくんと同じように、「働く」ことについて漠然とした不安を抱える読者は、彼に共感を覚えることだろう。

本書の特徴は、「働く」ことについて分かりやすく、視覚的に解説していることである。中高生向けに書かれているので、イラストやグラフが多く用いられている。「自己分析」「企業分析」等、就職活動をしていれば一度は耳にするであろうものについても、具体例を交えながらその方法が説明されている。「中高生向け」と侮るなかれ。「人生百年時代」「多様性」「新卒一括採用」など、中には大学生の我々にとっても考えさせられるトピックも載っているのだから、読んで学ぶところが多い。

「なぜ僕らは働くのか」——。すぐにはわからないかもしれない。だからこそ、本書を読んで考えてみてほしい。(出席点)

(二二八頁 本体一五〇〇円 3月刊)

「僕ら」の「女の子写真」 から わたしたちの ガリーフフォトへ

長島有里枝著 大福書林

二〇〇一年、

HIROMIX・長島有

里枝・蛭川美花の

三人が木村伊兵衛

写真賞を同時受賞

した。彼女らの写真は、写真評論家の飯沢耕太郎（「僕ら」）によって「女の子写真」と呼ばれ、身近な被写体、コンパクトカメラの使用、ヌードを含むセルフ・ポートレイトの形式が特徴的であるとされた。さらに男性と対比して「直感的」「軽やか」といった言葉で評価し、技術的な未熟ささえも賛美した。

このような言説に対し、長島は二〇一一年から四年間、大学院でフェミニズムを中心に社会学を学び、本書で「当事者から異議を申し立て」る。「女の子写真」論によって彼女たちが女性のステレオタイプ的な枠組みに押し込められ、「僕たちの写真界」の周縁に位置付けられる過程を、長島は当時の雑誌などに膨大な一次資料の分析によって明らかにする。さらに、ライオット・ガールなど第三波フェミニズムの一部として九〇年代の写真潮流を



捉え直し、彼女たちを「写真を通じて社会への怒りをプロテストし、自分はなにものなのかと探求する人々」であり、「女の子革命」を起こそうとする運動家」でもあった、「ガリーフフォト」の担い手と定義する。

「自分を写真に収める」ことは、「自分の身体の所在が自分にあることを主張」することであり、「個人的な問題は政治的である」の精神を受け継いだフェミニズムの実践であると長島は語る。今月号の特集「写真」と話題「女性差別なんて、今どきもう存在しない」？と合わせて読んでほしい。（石透）
（四二二頁 本体三三〇〇円 1月刊）

増補

責任という虚構

小坂井敏晶著
ちくま学芸文庫

コロナウイルスの蔓延を受けて、旅行に行ったり、宴会を行ったりしてクラスタを形成した集団に対して、世間の厳しい目が向けられている。曰く、「感染者が出たら責任をとれるのか」と。



私たちは自分の頭で考えて行動する理性を持っており、自分の決断に対しては責任を負う、この論理で近代社会は動いている。先に挙げた事例の背後にも、そのような想定が横たわっている。

しかし、私たちの決断は本当に私たちの頭の中だけで、理性的に、論理的に行われているのだろうか？ 社会心理学を専攻する著者は、そのような想定は虚構であると喝破した上で、現実を成立させるには虚構の存在が必要なのだと指摘する。虚構だからといってそれが無くてもいいという訳ではない。

本書はホロコーストや冤罪など、多様な事例を扱って、我々が普段、何気なく使う「責任」という言葉の背後にある考えや想定を、脳科学や哲学など、様々な学問を駆使して解体していく。外部の環境や心理状態など、様々な要因が判断に影響していることが、丁寧に明かされていく様は庄巻の一言である。

我々は果たして、未知のウイルスに対して「適切な」行動をとることができなかった人々の「責任」を問うことができるのだろうか。ネットニュースやメディアを見て「自己責任だ」と思う前に、本書を紐解かれることをお勧めする。（投稿・敷池）

（五三八頁 本体一六〇〇円 1月刊）

旅の効用

人はなぜ移動するのか

ヘール・アンデション著

畔上司訳 草草社



「旅の遺伝子」なるものがあるそう
うだ。その名も
「DRD4-7R」。この
暗号めいた遺伝子

を保持する人は、落ち着きがなく好奇心旺盛、そして新天地を求めて放浪の旅に出る傾向があるとされている。あなたもしくはあなたの周囲の人で、思い当たる節はあるだろうか？
本書は、過去三〇年に渡り世界各地を旅してきたスウェーデン人ジャーナリストが、自らの経験振り返りつつ、旅についての考察をまとめたエッセーである。

本の中では、貧乏旅行者から徘徊症患者まで、様々な形で旅に憑かれた人が登場する。そのうちの一人、あるスウェーデン人女性にとって、旅は「目的も意味も消える時間」だという。必ずしも何かの役に立ったり達成感を得るためのものでなくて良い。就活の履歴書に書けるような体験が全てではないのだ。

また、旅はある種のセラピーだと著者は考える。例えば、やる事なす事全てが裏目に出

て、物事が悪いようにしか進んでないような時がある。そんな時は荷物を鞆に詰め込み、ひとまず「世界に出ていけばいい」と言う。そうすれば何かが起こるかもしれないし、何も起こらなくても物事はよりよく見えるようになっていくはずだ。

変化のない日常に飽いた人にとって、本書は世界を自分に近づけるためのきっかけに、そして熱心な旅人には、旅の良き同行者になってくれるだろう。巻末には「読めば放浪しなくなる旅行記」リストも付いており、より旅を深めることができる。(はるな)

(二五二頁 本体二二〇〇円 1月刊)

論語

貝塚茂樹訳注
中公文庫

「学びて時に之を習う。亦た説ばしからずや。」
——二五〇〇年の長きにわたり読み継がれてきた、『論語』。本書は『論語』を詳しく知りたい人にオススメだ。

本書は貝塚茂樹氏による『論語』の訳本で

ある。貝塚氏は京都大学人文科学研究所の所長を務めた人で、我々京大生に所縁のある人物である。本書は『論語』のそれぞれの言葉に現代語訳をつけ、さらに各語に対して必要な訳注をつけて解説をしている。冒頭の有名な「学而篇」一の「学びて時に之を習う……」を「学んで時に習う……」と読むなど、貝塚氏ならではの『論語』解釈に触れることができるのが興味深い。

本書の優れたところは、その注の詳しさにある。とくに「新注」と「古注」という、『論語』における二大解釈の比較検討が役に立つ。たとえば「学而篇」四の「伝不習乎」という語は、「古注」では「習わざるを伝えしか」と読む一方、「新注」では「伝えて習わざるか」と読む。このような解釈の相違を列挙した上で、貝塚氏なりの訳がつけられている。そのため、読者は『論語』には複数の解釈が存在していること、またその解釈の相違を本書を通して知ることができる。

このように、本書は注による解説が充実しているが故に、初学者は難しく感じるかもしれない。しかし本書を熟読玩味することで、一層『論語』を理解することができるだろう。それは学ぶ者にとって、まさに「不亦説乎」としても喜ばしいことだ。

(六〇二頁 本体一六〇〇円 3月刊) (出席点)

告発と誘惑

ジャン・スタロバンスキー論

ジャン・スタロバンスキー著
浜名優美、井上櫻子訳 法政大学出版局

本書は「徳の憤慨」から始まる。

不正と悪徳、良心

の後退、憤るルソ

ーは文明社会を告

発する。しかしそれだけでは終わらない。罪

悪感を読者に植え付けたルソーは、よりよき

社会への導きも行うのだ。まるで宗教者のよ

うに。そう分析するのが本書、ジャン・ジャ

ック・ルソー論『告発と誘惑』である。

著者スタロバンスキーは昨年三月に亡くな

った。彼の博士論文にして名作を手にした

『透明と障害』は、今なおルソー研究におけ

る不朽の名作である。人々が繋がる透明な

社会を夢見ながらも、手にすることのできな

い障害を二項対立で描いたルソー論は、本書

において「告発と誘惑」という形で引き継が

れる。ルソー論で華々しく登場したスタロバ

ンスキーは、晩年もう一度ルソーと向き合う

ことでその生涯を閉じていった。

無論研究書としての価値も高い。だが評者



れてほしい理由は、その文体にある。ルソーが優れた哲学者であるだけでなく優れた雄弁家であったように、スタロバンスキーは優れた思想家であるだけでなく、優れた文筆家であった。翻訳を通して尚伝わってくる彼の名文に酔いしれてほしい。

エピソードは「ジャン・ジャック・ルソーに贈る花束」。生涯ルソー研究者として過した彼によるルソーへの感謝が語られる。誠に僥越ながら生涯大事にしたい本を書いてくれた著者に同じ言葉を送りたい。

スタロバンスキーに花束を。

(きもの) (四三〇頁 本体四二〇〇円 12月刊)

綴葉編集委員募集および 投稿募集のお知らせ

『綴葉』編集委員会では、編集委員を新たに若干名募集します。

仕事内容は、毎月二〜三本の書評を書くこと、毎週金曜日に行われる編集会議に出席して『綴葉』の編集作業に携わることです。編集委員には毎月若干の活動手当と、書評で取り上げた書籍の代金が支給されます。

対象は、京都大学生協加入者で大学院の修

了課程ないし医学部の五回生以上、そして右記の仕事を継続して行うことが出来る方です。この条件を満たし編集委員としての活動を希望される方は、本誌添付の読者カードに編集委員会への参加希望の旨を明記の上、生協のひとことポストに投函するか、『綴葉』表紙記載のメールアドレスへ直接お問い合わせ下さい。追ってご連絡申し上げます。

また、読者の皆様からの投稿も随時受け付けています。採用させて頂いた方には、書籍代(上限二五〇〇円)および薄謝を図書カードにて差し上げます。ふるってご投稿下さい。なお紙面の都合上、原稿を頂いても掲載できない可能性がございます。悪しからずご了承ください。

書評の形式は次の通りです。従来の規定から変更がありますので、ご注意ください。

① 「新刊/新書コーナー」: 新刊二〇字×三三行、新書二〇字×三三行。出版されてから四か月以内の書籍を対象とします。

② 「話題の本棚」: 三〇字×四二行。出版されてから四か月以内の書籍を対象とします。いずれの場合も、書名・著者名・出版社名・総ページ数・発行年月・本体価格と投稿者の氏名・所属・連絡先・ペンネームを明記して下さい。郵便・メールどちらでも受け付けます。宛先は本誌表紙を参照して下さい。

プーリストから村上春樹へ

「時間」で読み解く世界文学

岡本正明著 幻冬舎ルネッサンス新書

ときに速く流れては、ときにゆっくりと進み、作者によって自由自在に操られる物語中の「時間」。本書は「時間」という視点から二〇世紀の文学を概観した意欲作である。

二〇世紀の文学の多くは「時間との抗争」という特徴を持っていると著者はいう。一七世紀に機械時計が普及して以降、産業革命と資本主義の発展を経て、二〇世紀初めには「機械の時」が人びとの生活を支配していた。それだけに、作家たちは作品のなかでその支配に抗った。プーリストは『失われた時を求めて』で、外部の時間の経過によって失われたものを取り戻すため、自己の内部の記憶のなかに永続的なものを見いだそうとした。村上春樹は時間の一元性に抗って、複数の物語世界を並列させる手法を用いて、多元的な時間のあり方を描き出した。そしてあいたを埋めるように、ヴァージニア・ウルフ、フォークナー、トーマス・マンなど、二〇世紀文学を代表する人物が取りあげられている。

文学の入門にもなるし、文学を専門にしている人にも読み応えのある一冊だ。(三七)

(二二七頁 本体八〇〇円 2月刊)

危機に立つ東大

石井洋二郎著

ちくま新書

本書は東京大学の執行部に携わる立場にあった著者が、入試制度改革問題における政府と東大および国大協の議論、紛糾、意見集約のプロセスを改めて振り返ったものだ。

秋季入学と英語入試の民間試験活用という方針について、著者自身は「目的と手段の逆転」とみなし、慎重な姿勢を示す。つまり、方針は学生の国際力を高めるための手段の一つにすぎないのに、手段が先にありきで目的を達成しようとするところが問題なのだ。さらに、「人文・社会・自然」と分類され、実益が重視される風潮に対し、フランス文学という所謂「役に立たない学問」の研究者としての立場から著者は知の枠組みを委えてみせる。かつて書評された『文系と理系はなぜ分かれたのか』とも通ずる中々興味深い論考だ。その論考に裏打ちされた信念によって改革の延期を引き出せたのかもしれない。

法人になったとはいえ、「国立」を冠する大学として「言っべきことを言うべき時に言う」姿勢を保つ。その一言が受け継がれていくのか、今一度問い直される一冊。(ねこ)

(二五八頁 本体八四〇円 1月刊)

江南の発展

南宋まで

丸橋充拓著

岩波新書

以前中国人の日本史研究者と話したときに「昔の日本人の中国の歴史の本は読むが、今人は細かくて……」と言われて東洋学者ではないのに、言葉を失ったことがある。新出資料だけでも膨大な中国史、頃に中近世史についてなかなか「この一冊」は難しいのかと、本書を見るまでは思っていた。

本書『江南の発展』は戦国期から南宋までの中国を経済的基地の江南中心に専制的だが統治を嫌う封建制なき国、中国を長期持続体としてみていく。「国づくりの論理」と「人つなぎの論理」の相克という独自の作業仮説に基づき、和漢洋の東洋学者の用語やテーゼを散りばめ、情報量と読みやすさを両立させた本書は取り付きやすくない社会経済史からの、新書レベルでの久方ぶりの前近代中国史の決定版といえよう。

骨太な叙述を読んだ後、本邦の東洋史の斜陽を嘆く「あとがき」はあまりに切ないが、本書が潜在需要の発掘につながれると思う。冒頭所引の「岳陽樓記」の如く中国史に後継あらんことを。

(二三四頁 本体八二〇円 1月刊)

本日、図書館日和につき。。

今日は珍しく予定が入っていない。そんな手付かずでまっさらな一日を、どうやって過ごすか？ 家でのんびりするもよし、外で思いっきり体を動かすもよし。あるいは図書館に行って、書架の間をぞろぞろ歩いてみるのも良い。思いがけず手に取ってみたいような書籍が見つかるかもしれないし、頭の隅でモヤモヤしていた考えが纏まりだすかもしれない。今回は、私たちの知的好奇心や想像力の良き友である、図書館にまつわる本が主役だ。

図書館を生業にする

バス停「銀閣寺道」すぐ、今出川通沿いに、何やら不思議な建物がある。レトロな看板には、白抜きで「私設図書館」の文字。ここは、昭和四八年に京都大学の卒業生が創設した民営の図書館だ。田



中厚生著『京都「私設図書館」というライフスタイル』（コトコト）では、筆者が京大卒業後、企業へ就職せずに個人で図書館を始め、理想の空間を創り上げていく道のりが描かれている。落ち着いて読書ができ、誰でも気軽に立ち寄れ、夜遅くまで開いていること。著者は自らの希望を実現させるために奮闘する。評者もこの場所を訪問したことがあるのだが、外界とは異なる時間と空気が流れていて不思議な居心地の良さを感じさせてくれる空間だった。

驚異の図書館

スチュアート・ケルズ著、小松佳代子訳「図書館巡礼」限りなき知の館」への招待」では、書物を愛してやまない博覧強記の著者が、愛書家や図書館にまつわる様々な歴史や逸話を披露してくれる。世

界最古の「口誦図書館」から、隠し扉で内部の深層へと続く中世の修道院の図書館まで。本書を読めば、自室に居ながらにしてめぐるめく図書館ワールドへ迷い込むことができる。

読んで愉しむ図書館本だけでなく、見て愉しむものもある。頁をめくっているだけで、童心に帰ったようにワクワクさせてくれるのが、アレックス・ジョンソン著、北川玲訳「世界の不思議な図書館」（創元社）だ。本書は世界各地のユニークな図書館を、写真を中心に紹介してくれている。電話ボックスを改造したマイクロ図書館、ラクタが連ぶ移動図書館、一度に一人しか入れない図書館……。立派なハコモノだけが図書館ではない。図書館とは、人間の想像力次第でどんな形をも取り得るのだということがよく分かる一冊だ。



「無いもの」から考える

日本で最も蔵書数が多い図書館は、国会図書館である。しかしながら、国会図書館は日本で発行された全ての本を網羅している訳ではなく、そこには無い書も数多く存在する。磯川全次著「雑学の冒険―国会図書館にない100冊の本」（批評社）は、言わば、そんな取り零された本たちにスポットライトを当てるといって一風変わった試みをしている。国会図書館に置いていないからといって、価値がないとは言えない。著者が、「自己主張」が強い「魅力にあふれた百三〇冊の本が、私家版・非売品、サブカルチャー、雑誌の付録など、様々なジャンルに分けて紹介されている。「欠けている本」から図書館を考える糸口を与えてくれる良書である。（はるな）

みんな「愛」している」と言いつけられど

大学入学を機に実家を離れ一人暮らしを始めた人もいる季節である。今年はいわゆるコロナウイルスの影響で他人との距離に気を付けることを「要請」される時期に当たってしまった。それは不特定多数の「他人」だけでなく、家族の間にも求められている。親に感染させる恐れがある、と帰省を躊躇う人も多いと聞く。ただし親としては帰ってきて元気な顔を見せ、安心させてほしいようだ。親が子のことを気にかけて、子どもが親のことを気にかける、健全で望ましいように見えるが果たしてどうだろうか？ここでは最近よく聞かれるようになった「毒親」についての本を取り上げよう。

早くからこの問題を取り上げているものとして有名なのがスーザン・フォワードの『毒になる親 一生苦しむ子供』（講談社14文庫）かもしれない。九〇年代に出版されたものだが、現在でも参照されて然るべき一冊であろう。この本では前半で子供を傷つけコントロールしようとする親、ということでも様々な事例が紹介され、後半ではそのような親から傷つけられて育った人向けの心理的ケアや対処法が書かれている。肉体的あるいは精神的に子供を傷つけるような振舞いをし、精神的もしくは経済的になかたちで子供をコントロールしようとする親。それに晒された結果、自己肯定感が低く自己破壊的な振舞いをする子ども。そんな親子関係が見えてくる。

それはいわば変な親と不幸にしてそこに生まれた子どもの関係ではないのか？そう思う人もいるだろう。次は押見修造の『血の轍』（小学館）を挙げたい。主人公の静一は少し大人しい、といっても



普通に男子の友達もいれば片思いの相手もいる、今時の草食系中学生男子。両親とも優しく、特に母親の静子は彼に甘い。仲の良い親子として描かれ始めた関係が、静一の従兄弟シゲルの「過保護」の一言で、そのままの形で、だが狂気的な様相を帯びたものに変わっていく。静子の愛顔ふりはマンガであるがゆえに具体的なイメージを伴って心に刺さってくる。突然のヒステリーや自傷行動などは『毒になる親』に書かれた親の行動に通じるものがある。印象的なのは作中で静子が語る独白だ。子どもの頃愛情を与えられなかったことに苦しんだ彼女は母親として息子に愛情を注いでいるのだという。親の側からすれば自身の振舞いは「愛情」ゆえなのだ。

そんな親との間柄に苦しむ子どもの側からの親子関係を描いたのが田房永子の『それでも親子でいなきゃいけないの？』（秋田書店）である。子どもの側からすれば親の振舞いは「愛情」ではなく「虐待」に近い感覚であることがよくわかる。ただしそれは親にも、そして周囲にも理解されないほうが多いということも同時に見えてくる。『血の轍』のシゲルは子どもの感覚として「過保護」と断定出来た。しかし大人は「仲良しの家族」や「愛されている子ども」という見方に留まってしまふ、自分がそれほど愛されなかったと羨みながら。

今後、虐待やDVが増える恐れがあるという報道もある。必ずしも憎しみから出るものとは限らない。だが、誰にとつての「愛情」なのか、それを評価する術を誰が決めるのだろうか。（ねい）



編集後記

還暦でライフネット生命を創業した出口治明氏。京大OBでもある彼が大事にしている学びとは「人・本・旅」、すなわち、沢山のひとと出会い、様々な書物を読み、外に出て実体験を積むことだ。そうすることで視界がひらけ新しい考え方が出来るようになるのだが、いつしかこの教えはわたし自身が大切にしたいことにもなった。

昨年度わたしは大学院を休学し、海外バックパック旅行に出た。東南アジアを皮切りに、1年弱ほどユーラシア大陸のあちこちに赴いた。旅の間は現地の人と話し込んだり、家に泊めてもらったり、出会いの連続であった。その意味で、去年は「人・旅」に関してはこれ以上望めないほど濃い一年だったと言える。しかしながら、読書はあまり出来なかった。電子書籍に対しては違和感があるため、紙の本で読みたい。そうなると、海外でも手に入りやすい洋書が中心になり、読書スピードや内容理解が母語よりも劣ってしまう。「本」の要素に関しては、物足りなさを抱えていた。

その反動で、帰国後は食欲に、好きなだけ本を読もうと決めていたのだが、縁あって『綴葉』の編集に携わることになった。これから1年は本を中心とした年しつつ、本を通じて人と関わり合えれば、と願ってやまない。『綴葉』という場をお借りして、皆様が素敵な書物と出会えるお手伝いができますように。(はるな)

当てよう！ 図書カード

「ねえ、考えてみて」彼女は言う。夜9時の、鴨川デルタ。「3,222,9 = 桜。6,999 = 春。11111,0,99 = 終わり。」——暗号か？「このとき、3,888,111,5,9 は？ それが私の答え。」それじゃ、と彼女は立ち去る。いくつかの選択肢が頭に浮かぶ。「3,888,111,5,9」の意味は、どれなんだろう？ (出席点)

1. アイシテル
2. アリガトウ
3. マタアシタ
4. サヨウナラ

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください(またはe-mail:teiyos@s-coop.net)。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは6月15日です。

1・2月号の解答

1・2月号「ファーストアルバム『十七歳の地図』」に収録されていない曲はどれでしょうか？」の解答は、4. 卒業でした。応募者9名中9名の方が正解でした。多数のご応募ありがとうございました。図書カードの当選者は、はゆかさん、湖底の蟹さん、朝知流さん、深みの巡礼者さん、長老さん(順不同)です。おめでとうございます。(きもの)

読者がらひひひ

〇いつも楽しく読んでいます。最近はずいぶん表に必要な本はたくさん読んでいますが、そろそろ小説が読みたくなってきました。

(法・湖底の蟹)

——専門書ばかり読んでいると、頭がごちゃごちゃになったような気がしますよね。忙しい日々の合間、コーヒーやお茶を片手に小説の世界に没るのは、最高の息抜きになると思います。

〇1・2月号の『綴葉』は、音楽が聴きたくなる記事が多かったです。(工・Soso)

——読書と音楽は相性が良いですね。心地よい空間にいると、自然と本も進みます。皆さんは本を読む際、どんな音楽を聴くことが多いでしょうか？

〇他大学にも『綴葉』のような書評誌があるならコラボしてみても面白い。芸術大学などだとより違った視野の本が出てきそう。

(農・まじり)

——ご提案ありがとうございます。確かに、他大学の書評誌というのは個人的にも気になります。今まで他の大学の書評誌を目にする機会が無かったのですが、あれば是非読んできたいですね。発見が多そうです。(はるな)